フロイトにおける道徳性発達の論理

―― エディプス・コンプレックス概念の検討を中心に ――

須川　公央(東京大学大学院)

はじめに

オイディプスの毒はいたるところに蔓延している。そして私たちの知らないうちに，オイディプス的思考はあまりに深く私たちのうちに根を下ろしているので，私たちはその結果が何なのか，もはや分からなくなっている。社会の「オイディプス化」はあまねく広まってしまっているのだ。　[Olivier 1980=1996 : 269]

教育という営みを広く，子どもの規範意識＝道徳性の育成を目指す作為一般として捉えるとき，そうした子どもの教育に不可欠な契機として，＜父＞の役割が強調されるということは，従来の教育理論なり，思想なりに広く散見されるところである。昨今の教育言説を瞥見してみても，例えば，今日の豊かな社会における病理ともいうべき教育困難性を，親の規範性(父性)の衰退として捉え，家庭内における道徳的権威の復権を求めるような「父性の復権」論，さらには公的機関としての学校に対しても，最低限の父的機能を積極的に担保させるような道徳教育，宗教教育の強化など，父性的なメタファーによって語られる教育言説は枚挙に暇がないほどである。

ところが，宮澤康人が指摘するように，こうした子どもの道徳的情操の決定的な契機を担うとされる＜父＞の問題が，これまで教育学においてほとんど主題化されてこなかったと言うとき[1]，その指摘が含意するのは，教育言説ないしは思想に所々見え隠れするこうした「父性イデオロギー」を解明する方法論的視座の欠如にあったと考えられよう。

そこで本稿では，こうした＜父＞を媒介とした子どもの道徳性をめぐるメタフォリカルな語りが，総じてある一つの基本モデルに準拠していると仮定して，そのメカニズムの解明を試みようと思う。その基本モデルこそ，精神分析学が暴き出した主体化のメカニズム，すなわち子どもを道徳的主体たらしめんとする「エディプス・コンプレックス Ödipuskomplex」のことである[2]。

周知の通り，エディプス・コンプレックスは，S.フロイトによって発見された概念である。母親とナルシスティックな関係を取り結んでいた子どもに対して，父親が去勢の脅かしを掛けることによって，母親に対する近親相姦的願望を断念させる，と同時にそれは，子どもの文化的・象徴的社会への参入を促進し，それが子どもをして一個の自律的な道徳的主体として立ち上げることになる，というものである。

さて仮に，このエディプスモデルが，子どもが道徳性を獲得するための基本モデルとして，先に見たような「父性イデオロギー」に彩られた教育言説にその範型を提供していると理解するならば，それはまさに教育という営みが，父権の行使を通じてエディプス的な道徳的主体の再生産に寄与しているということであり，とりもなおさずそれは，冒頭の引用文においてC.オリヴィエが憂慮した事態，つまり社会の「オイ

ディプス化」という事態に教育が加担しているということに他ならない。即ち，教育は規範的＝道徳的主体の，さらにはその主体を産出するために行使される父権一般の再生産装置として，知らず知らずのうちにオイディプスの毒をいたる所に撒き散らしているというわけである。

本稿はこうした問題意識のもと，S.フロイト(Sigmund Freud 1856−1939)のエディプス・コンプレックス論および超自我概念を発達論的観点から検討しつつ，それらに対するフェミニズムからの批判を交えながら，フロイトにおけるエディプス的主体化モデル[3]の再考を試みることにしたい。本稿全体の議論を通して確認されるのは，エディプス・コンプレックスの発見により，「父性イデオロギー」のメカニズムを暴き出したフロイトの理論が，図らずしてそうした「父性イデオロギー」に加担してしまっているという事態である。

1．フロイトにおける道徳性発達の起源としてのエディプス期

数ある精神分析学理論の中でも，エディプス・コンプレックスほど多くの人を魅了し続け，同時に数々の批判にさらされてきた理論は他にはないと言っても過言ではないであろう。その理論は今なお検討の余地を残されたものとして，精神分析学は言うに及ばず，文化人類学，社会学，フェミニズムといった隣接諸科学をも巻き込んだ形で，諸科学における理論的テーマの一つであり続けている。とりわけ精神分析学とフェミニズムの関係で言えば，例えば，「大部分のフェミニズムは，フロイトを敵と見なしている。‥‥精神分析は，ブルジョア的，家父長制的な現状を正当化するものであり，フロイト自身が身をもって，それら性質を例証していると考えられているのだ。」[Mitchell 1974=1977 : 5]というJ.ミッチェルの一文に象徴されるように，精神分析学 —— とりわけそのエディプス・コンプレックス論 —— は，父権的＝男性中心主義的なイデオロギーを体現し，家父長制の再生産に寄与するものであるとして，フェミニズムの理論家たちから度々断罪されることとなった。

ところで，フロイトによればこのエディプス・コンプレックスは，子どもの道徳性の発現に関わる重要な契機として理解されている。先述したように，子どもはまず始めに異性の親に対して強い性的愛着を抱くようになる。しかしそうした異性の親に対する近親相姦的な願望は叶うことなく，最終的には父親による禁止 —— いわゆる去勢の脅かし —— によって断念させられることになる。以後，父親による近親相姦的願望の禁止は，潜伏期を通じて，「道徳の権化」[Freud 1933=1971 : 436]たる「超自我Überich」として子どものうちに内面化されることになるというのである[4]。

しかしながら我々は，こうしたエディプス・コンプレックスの発現と終結に至る一連のプロセスが，そもそもの理論化の出発点において，父親と息子の関係をモデルとして構築されたという事実を思い起こさねばならない。フロイトは後に，このエディプス・コンプレックスが女児の場合にも適用できるとして，その理論的拡張を試みるのであるが，その理論的帰結は男性優位の下，女性の道徳的劣等性を強調するというまさに男性中心的な偏向を特徴とするものとなってしまった。女児の場合は，そもそも去勢されるべき男根が備わっていない。ゆえに去勢の威嚇(＝近親相姦的願望の禁止)は効力を持たず，したがって欲動の禁止的審級である超自我の形成も男児と比べて相対的に困難であるというのである。

以下では，フロイトのエディプス・コンプレックスの発生から解消までのプロセスを男児の場合と女児の場合とに分けながら考察し，その男性中心主義的偏向を明らかにしつつ，男児と女児の道徳性獲得までのプロセスとその非対称的性格を明らかにしていくことにしたい。

1.1 エディプス・コンプレックスの終結から超自我形成へ ―― 男児の場合 ――

フロイトがエディプス・コンプレックスの典型例として示した論文「ある五歳児の恐怖症分析」(1909)は，男児におけるエディプス・コンプレックスを理解する上で，極めて格好の素材を我々に提供してくれる。少年ハンスの母親に対する近親相姦的愛着，馬に投影された父親像，そしてその馬に噛まれるという幻想が示す父親からの去勢の脅かし，さらには自らも父親と同じような男根を獲得したと幻想することによって，その去勢不安を解消していくという少年ハンスの馬恐怖症に始まるこの一連の症状が示すのは，エディプス・コンプレックスが如何にして生起し，そして消退していくのかというエディプス・コンプレックスの生成論そのものと言えよう。

後にフロイトは，この過程をいくらか図式的な形で理論化したが，もはや検討され尽くしてしまった感もあるこのプロセスを，簡略化することを臆せずにまとめるとすれば，それは以下のようになる。

まずエディプス・コンプレックス開始の第一段階目として挙げられるのが，それを生起させるに最大の原因ともいうべき，母親への近親相姦的願望の萌芽である。口唇期，そして肛門期に続く男根期において，男児の部分欲動は性器(男根)優位の下に統合され，それがエディプス構造への参入を準備する。性器に快感を感じるこの段階において，男児は「母親を身体的に所有したいと欲し，自分が誇りを持って所有している男性器を母親に示すことによって，母親を誘惑しようとする」[Freud 1940=1983 : 194] のであるが，それが男児をして母親への近親相姦的願望と，その裏面としての父親への嫉妬の感情を醸成することになる。異性の親への性愛，そして同性の親への憎しみに特徴づけられたこの男根期は，同時にエディプス・コンプレックスが生起する時期でもある[5)]。

かくして男児は，<父－母－子>から成るエディプスの三つ巴の世界へと身を投じていくのであるが，先に見た母親に対する近親相姦的願望は叶えられることなく，その願望はすぐさま断ち切られることになる。自慰に夢中になり，母親に対して排他的な性愛願望を抱いていた男児に対して，母親ないし父親は「男児がいうことを聞かずにもてあそんでいる性器を奪い取ってしまう」[ibid.] と去勢の脅かしをかけることによって，男児に去勢不安を呼び起こし，母親に対する近親相姦的願望を諦めさせようとする。即ち，「去勢コンプレックス (Kastrationskomplex)」の発生である。さらに，男児の去勢コンプレックスは，「女の子の性器部を見て，自分とよく似た子どもでありながらペニスがない」[Freud 1924=1970 : 312] という事実を認めざるおえないとき，一層深刻なものとなるのである。

さてフロイトによれば，男児は自らに降りかかるこうした去勢不安に対して，次のいずれかの方法によって，その不安を解消しようと試みるとされる。まず一つは能動的方法と呼ばれるものであり，これは「自分を父親と同一視することによって，父親と同じように母親と接」[ibid.] し，自らも父親のようになることによって，父親からの去勢の脅かしを克服しようとするものである。「この場合は，やがて父親を邪魔者と感じるようになる」[ibid.] ので，エディプス・コンプレックスはさらに強化されてしまうことになる。フロイトが記載したもう一つの方法とは，受動的方法と呼ばれるものであり，先の能動的方法とは逆に，自らを母親に同一視することによって，「母親にかわって自分が父親から愛されようとするもの」[ibid.] である。母親に同一視するということは，自らを男根を持たない者と規定することでもあるので，去勢不安そのものが回避できるというわけである。

こうして男児は，去勢不安を解消しようと，いずれかの方法を選ぶことになるのであるが，フロイトは，その両手段ともに男根を失うことになるという点で，結局は失敗に終わると言う。

というのも，前者の場合は最後まで父親と対峙することになるので，結局は父親に敵うことなく，最終的には去勢され処罰されてしまう結果をもたらし，そして後者の場合には，男根を持たない母親の位置に据わろうとすることによって，男根その物を持つことを断念せざるおえなくなるからである。

では，こうした去勢不安は一体どのようにして解消されるのだろうか。フロイトによれば，それはエディプス的欲望 —— 母親への性愛と父親への憎しみ —— を放棄すること，さらには他律的であった父親の権威と禁止を自らに同一化することによってのみ可能であるとされる。そして，この父親の権威と禁止の内在化によって成立するものこそ，フロイトが「エディプス・コンプレックスの継承者」[Freud 1940=1983 : 208] として記載した道徳的審級，すなわち「超自我（Über-Ich)」に他ならない。

> 父親または両親の権威が自我の中に取り入れられ，それが超自我Über-Ichの核となる。超自我は，父親の厳しさをそっくり受け継ぎ，近親相姦に対する父親の禁止命令を永続化し，自我が両親に対するリビドーの対象備給を二度と繰り返さないようにするのである。エディプス・コンプレックスに伴う性欲動の一部は非性化され昇華されるが，これは同一化が行われる過程において起こるのである。
>
> [Freud 1924=1970 : 313]

以上見てきたように，超自我の起源は，両親に対する愛と憎しみの感情に彩られたエディプス的欲望の挫折に端を発するものであるが，無論，それは父親による近親相姦的願望の禁止のみならず，その後の人生における様々な文化的・社会的諸要求によっても強化されることになる。超自我は「両親にとって代わった人々，つまり教育者，教師，いろいろな理想像の影響を受け」[Freud 1933=1971 : 439] ながら，さらに堅固なものとして確立されていくのであって，その形成はエディプス期という特定の一段階においてのみ達成されるのではなく，規範意識の発達に伴って，欲動の支配する快楽原則から法の支配する現実原則への移行という長い道程を経て徐々に確立されていくことになるのである。

1.2 エディプス・コンプレックスの終結から超自我形成へ —— 女児の場合 ——

フロイトの著作をその時系列に沿って読み進めていくとき，我々は，女児の性愛とそのリビドー発達に関するフロイトの議論が，極めて錯綜した理論的変遷のもとに展開されていることに気づく。とりわけその理論的転回点として銘記すべき論文「解剖学的な性差の心的帰結の2，3について」(1925) において，フロイトは，男児と女児におけるエディプス・コンプレックスの一連のプロセスが，対称的に進展するというこれまでの考えを斥けて，唯一，男女両性における男性性器の優位性を強調することにより，そのリビドー発達の非対称性を主張するようになる。男児，女児ともに，各々が所有する性器 —— 男児の場合は男根，女児の場合は陰核と膣 —— に従って，性器期体制がいわば対称的に進展，確立されていくのではない。両性ともに，そのリビドー発達は，「唯一の性器，即ち男性性器だけが役割を演じているのであって，要するに，性器優位ではなく，男根優位である」[Freud 1923b=1984 : 99] と言うのである。

以下では，こうした男根優位のもとに理論化された女児のエディプス・コンプレックスを，その発生から終結までの道筋を子細に辿りつつ，順を追って見ていくことにしよう。

まずフロイトによれば，エディプス期以前の前エディプス期において，「小さな女の子は小さな男性で」[Freud 1933=1971 : 482] あり，「小さな女児の性愛はまったく男性的な性格を持っている」[Freud 1905=1969 : 75] とされる。というのも，フロイトによれば「女の子の男根期には，陰核が主導的な催情部」[Freud 1933=1971 :

482］であるとされており，それは男児にとっての男根と同等の機能を有するものとして理解されているからである。

しかし後に，「女児は兄弟や遊び友達のはっきりと目につく，大きな形をしたペニスに気付き，それが自分自身の小さな陰に隠された器官とは反対に優秀なものであることをすぐさま認識して，その時から女児は男根羨望に陥ってしま」［Freud 1925=1969:164］うことになる。自らの性器に対する劣等感と男根への羨望，それは女児をして，自身を本来の性愛対象である母親から分かつ契機でもある。

> 母親から離反させる最も強い動機として，彼女が子どもにちゃんとした性器を与えてやらなかった，つまり子どもを女児として産んだ，という非難が浮かび上がってくるのである。［Freud 1931=1969 : 147］

こうした女児による母親からの分離は，性愛の対象を母親から父親へと転換すること ―― 女児におけるエディプス・コンプレックスの生起 ――もまた同時に意味している。先述したように，男児は父親による去勢の脅かしによって，母親への情愛を断ち切り，エディプス・コンプレックスを解消した。ところが女児の場合には，すでに去勢されてしまっているという事実，そしてその事実に対するコンプレックスが，母親への憎しみの感情，そして父親への愛情というエディプス的関係を成立させるのである。

> 女児の場合にはエディプス・コンプレックスは二次的な形成物である。去勢コンプレックスの影響がこれに先行してその準備をする。エディプス・コンプレックスと去勢コンプレックスの関係については，両性の間に根本的な対立が生じてくる。男児のエディプス・コンプレックスは去勢コンプレックスに行き当たって滅びていくのだが，女性のそれは去勢コンプレックスによって可能とされ，また惹起される。［Freud 1925=1969 : 169］

こうして女児は，性愛の対象を母親から父親へと向け変えるのであるが，フロイトによれば，その対象転換は容易になされるわけではない。女児は既に去勢されてしまっているという逃れきれない現実に対して，「(a)性生活全般への中止の傾向，(b)反抗的に男らしさを強調する方向，(c)究極的な女らしさへの萌し」［Freud 1931=1969 : 145］という三つの手段のいずれかによって，去勢不安を解消しようと試みることになるが，唯一，「第三の発達［究極的な女らしさへの萌し］がはじめて，正常な女性としての終局形態に通じていく」［ibid.143］とされるのである。つまりこれは男根期において小さな男の子であった女児が，自ら「小さな男性」であることを諦めて，女性であるという事実を受け入れるということを意味する。かくして女児は，「男根羨望(Penisneid)」を断念し，男根の代わりとなるものを新たに自らの内に見いださねばならない。この男根にかわる新たな代替物，それは子どもである。

> しかしいまや女児のリビドーは ―― ペニス＝子どもという予示された象徴的な方程式にそって，ということができるだけだが ―― 一つの新しい位置に滑りこんでいく。彼女はペニスへの願望を棄てて，子供を持とうとする願望にかえようとし，このような意図から父親を愛の対象とするようになる。母親は嫉妬の対象となり，女児は小さな一人の女になったのである。［Freud 1925=1969 : 168］

こうして女児は，父親の寵児たらんとして，エディプス的世界へと足を踏み入れるのであるが，その帰結は男児のそれほど明らかなものではない。というのも，「女児の場合には，エディプス・コンプレックスが崩壊するための動機がない」［ibid.169］とフロイトがいうように，男児のエディプス・コンプレックスが去勢コン

プレックスによって解消されたのに対し，女児のそれは，去勢コンプレックスによって惹起されるため，エディプス・コンプレックスを解消する為の動機が失われてしまっているからである。

従って，エディプス・コンプレックスの継承者である「超自我も，われわれが男性に要求するほどには決して峻厳なものでも，非個性的なものでもなく，その情動的起源から独立したものではない」[ibid 169f.] ということになり，超自我の解消によって可能とされる文化的・象徴的社会への参入も男児と比して相対的に困難とされるのである。

2．フロイトにおけるジェンダー ―― ジェンダー非対称性に関する考察 ――

以上の議論を手掛かりに，ここではフロイトのエディプス論に見られるジェンダー非対称性に関して検討していくことにしたい。

まず，エディプス期以前の前エディプス期において，男児および女児ともにそのリビドーは，母親に向けられるということはこれまで見てきた通りである。フロイトによれば，この時期の両者は，もちろん解剖学的には性差は存在するのであるが，心理学的には未だその性は未分化であるとされる。そこでフロイトが，この時期における女児と男児の心理的性を表現するために用いたのが「両性具有性(Bisexualität)」という概念である。フロイトはこれを，男児，女児共に各々における心理・社会的性としての「男性性(Männlichkeit)」および「女性性(Weiblichkeit)」が未だ分化されていない状態を表現するために用いている[6]。

さて，エディプス期に突入すると，その対象関係は若干変化することになる。男児はエディプス期においても母親を自らの性愛対象とするのに対し，女児の場合は，父親へとその対象を代えるのである。フロイトが「女の子は時が経つにつれ自分の性感帯と対象を取り換えなくてはならないのですが，男の子にはその必要がないのです。」[Freud 1933=1971 : 482] と述べるように，エディプス期に入ると，女児は主要な性感帯を陰核から膣に代えることによって，性愛の対象を母親から父親へと転換するのである。

陰核に代わって膣へと主要な性感帯を代替させるこのプロセスは，女児における女性性の発現と重なり合うのであるが，実際には，女児の男根羨望および男児の男根に相当するとされる陰核への快感は完全には失われることはないので，エディプス期の初期段階(男根期)にあっては，男児，女児共に男性性が優位とされることになる[7]。

しかし問題は，男児，女児共に男性性が優位とされているにもかかわらず，男児と女児とでは，その男性性に大きな隔たりが存在するという事実である。つまりこれは，男児の男根と女児の陰核との間に存在する質的な差を意味する。「女の子の陰核は，規範的な男根から三重に隔てられている。」[Kofman 1980=2000 : 191] というS.コフマンの指摘は，こうした事態を見事に言い当てているのであって，というのも，男児の男根は規範的な男根(つまり父親の男根)より一段，劣っているとされるのに対し，女児の陰核はその男児の男根からもさらに一段，劣ったものとされるからである。

従ってそれは，「男児の場合にはこの去勢コンプレックスの影響の残余として，去勢されたと認められる女児に対する，ある程度の蔑視のようなものが見られる。‥‥女児は自分が去勢されている事実を承認し，そうすることによって男児の優越性と自分自身の劣等性をも認める」[Freud 1931=1969 : 143] ことにもなり，最初のジェンダー同一性 ―― つまり両性具有性のこと ―― はここにおいて脆くも崩れ去って，両者のジェンダーは非対称的に分化し始めることになるのである。

しかし，そもそも事の始めとして，女児は自らを去勢されている者として認め，その結果として男根を羨望することなど本当にあり得るの

だろうか。「女性のペニス羨望ないし去勢コンプレックスなるフロイトの考えを裏書きする重要な客観的証拠を，彼は何一つ持たないのだから，これらすべてに投げかけられている主観性がいかに徹底してフロイト自身のものであり，それも強烈な男性的偏見，いささかはなはだしい男性優位主義的偏見に立つ主観であるかには驚くほかはない。」[Millet 1970=1985 : 321] というK.ミレットの批判にもあるように[8]，常に男根の在・不在という観点から理論化されているフロイトのエディプス論は，まさに男根中心主義と批判されるにふさわしい理論体系であると言うことが出来よう[9]。

このように，フロイトのエディプス論は，最初のジェンダー同一性 —— 両性具有性 —— を主張することによって，その後のリビドー発達におけるジェンダーの対称的な進展を目論んでいるかのように見えるのであるけれども，結局は，その後の展開において男性モデルが特権化されることにより，男性こそが存在論的決定を受けるにふさわしい者とされるのである。そして女性はと言えば，男性という基準ないしは規範体系の周縁に追いやられることによって，「構造劣位者」(山口昌男)としての地位に貶められることにもなろう。

さらに，父親および母親の地位に関しても同様である。これまでの検討において確認してきたように，父親は文化的な現実原則を表象するのに対し，母親はといえば，子どもがその文化的世界に参入するために超克しなければならない諸々の欲望を表象している者とされることになる。したがって，男根を所有する男児は，エディプス・コンプレックスの解消を経て，文化的・象徴的世界へと参入することが可能であるのに対し，父親による去勢の禁止を内在化しないが為に超自我の形成が未発達であるとされる女児は，エディプス・コンプレックス解消の動機を失っていることにより，男児と比して，文化的・象徴的世界への参入が相対的に困難であるとされるのである。

以上，フロイトのエディプス・コンプレックス論の検討を通じて確認されたことは，まさにそのエディプス・コンプレックスが男女の心理・社会的性差＝ジェンダーを非対称的に分化させていく，言うなればその装置であるということであった。そしてこの非対称性ゆえに，エディプス期に起源を見るフロイトの道徳性の発現＝超自我形成に関する理論は，こうした男性(男根)を基準とした価値体系を議論の中軸に据えたうえで，女児における超自我＝道徳性の劣等性という帰結を導くのである。序章において提示したフロイトのエディプス的主体化モデルは，以上のような男女の非対称的なリビドー発達のプロセスにその基礎を置いているが，父権の行使(去勢＝快感原則の放棄)を通じて再生産される規範的＝道徳的主体とは，実に男性主体を指すのであって，逆を言えば，エディプス的主体化モデルは，女性ないしは母親を男性基準の周縁に追いやることによってのみ，その存立が可能になるのだと言えよう。

最後に，フロイトのエディプス的主体化モデルが独自の生物学的決定論 —— 男根の所有・非所有によって男女の心理的性差，はたまた社会的性差が決定するという —— に依拠している事実が明らかになったいま，我々は，フロイトの理論に家父長制社会一般に見られる“父性イデオロギー”の構造論的な解明の契機を見るべきなのであろうか，あるいは逆に，“父性イデオロギー”を強化するものとして，それら言説に範型を提供しているものとして理解するべきなのであろうか。「フロイトによる女性の道徳性や客観性についての評価は，論理的にも経験的にも弁護の余地がないと結論しなければならない。これらの評価は，これまで公平無私で，文化に拘束されない科学的な見解として，間違って受け取られてきた因習的な家父長制的価値や判断に，大いに道具として働いているのである。」[Schafer 1974 : 267f.] というR.シェーファーの一文がいみじくも指摘する通り，さしあたりここでは後者の方に軍配をあげるのが妥当で

あるように思われる。

【註】

1）宮澤は「<父>殺しの教育学」(2001）と題された論文において，<父>という主題が，発達心理学，社会学といった教育学という学問領域の埒外で語られる事は多々あるにしても，教育学において主題化されてきたことは極めて稀であったと指摘する［宮澤 2001a］。この点に関する宮澤の詳細な文献考証については，以下の論文を参照のこと［宮澤 2001b］。

2）「父親の役割に特権を与えることは，エディプス的モデルのほとんどすべての説明に見られる。さらにこれは，現代の社会病理に対する通俗的な診断 —— 手に負えないナルシシズムの氾濫は，権威の喪失と父親の不在が原因なのだという見解 —— の土台にもなっている。」［Benjamin 1988＝1996：185f.］というJ.ベンジャミンの指摘にもあるように，いわゆる“父性イデオロギー” —— 父性的なメタファーによって語られる教育言説も含めて —— の理論的典拠として，しばしばフロイトのエディプスモデルが引き合いに出されてきたという事実は，これまで多くの研究者たちによって指摘されてきたところでもある［cf. Millet 1970=1985など］。

3）本稿では，“エディプス的主体化モデル”という用語を，M.フーコーの「従属化＝主体化 assujettissement」に倣って，父的権力の内面化(＝父親による禁止の内在化)とそれに伴う欲動の自己監視装置の構築を通じて(＝超自我形成)，自己を自律的な一個の道徳的主体として立ち上げるような機制一般を意味するものとして用いることにする。

4）フロイトによれば，超自我はエディプス・コンプレックスの解消に伴って発生するとされているが，それは同時に，フロイトの第二局所論で言う，エス，自我，超自我という三つの審級から成る心的装置の構造化の過程とも対応しているということをここでは銘記しておきたい。因みに，フロイトはこれら三つの審級を道徳的見地から次のように特徴づけている。「衝動抑制，つまり道徳の見地からみると，次のように言うことが出来よう。エスはまったく無道徳であり，自我は道徳的であるように努力し，超自我は，過度に道徳的で，エスに似て非常に残酷になる可能性がある。」［Freud 1923a=1970：295f.］。

5）一般に，この男根期とエディプス期は同一視される向きもあるが，実際，両時期は互いに重なり合いながらも厳密には峻別されるべき概念である。「エディプス期(oedipal phase)については，一部の研究者は発達段階における男根期(2歳半から6歳まで)とまったく同じ意味で用いているが，他の研究者は，男根期が終わりに近づき，構造的にも力動的にもエディプス・コンプレックスが十分に形成された時期を指すために使い，男根期とは区別している。」［Moore 1990=1995：31］。そこで本論では，便宜的にエディプス期の初期段階を男根期と呼ぶことにしたい。

6）「両性性は女性性と男性性の形而上学的対立を無効にするが，この無効化は一方の性，すなわち男性の支配に有利に働く。男性は最初の女性性を克服する必要は全くないからである。どちらの性も最初は両性的だという先の主張にもかかわらず，一方の性，すなわち男性が実際には有利である。どちらの性にとっても，支配的な性感帯は常にペニスであるからだ。」［Kofman 1980=2000：185］とコフマンが言うように，この両性具有性という概念は，いわば「疑似男性性」である。というのも，フロイトの両性具有性という主張にもかかわらず，男根期に突入すれば両性とも必ず男性性が優位となるからである。従って，両性具有性とは，そこから男性性と女性性とが均等に分化していくマトリックスのようなものでは決してなくて，むしろそれは男性性の前駆形態として考えられるべきであろう。

7）「次の幼児の性的体制の段階(男根期)では，男性性はあるが女性性はない。ここでの対立は，男根所有と被去勢がその内容だからである。」［Freud 1923b=1984：101］とフロイトが言うように，男根期(エディプス期初期)は，男性性が優位の時期である。「真の女性的状況が作り出されるのは，ペニスへの願望が子どもへの願望に取り替えられるようになってから」［Freud 1933=1971：490］のエディプス期後期においてであり，完全に「男性性と女性性という性の両極性が成立するのは，その発達段階が完了する思春期に至ったときである」［Freud 1923b=1984：101］とされる。

8）「どうしてフロイトは「女の子にはペニスがない」という記述から「彼女は自分の去勢を発見する」という記述に移行できるのか。これは女の子の視点か，それとも男の子の視点か，幼児性欲論の段階に固着しているフロイ

トの視点か。」[Kofman 1980=2000 : 251f.]。このコフマンの疑問も同様に，フロイト理論における男根中心主義を暗に批判しているものと考えられよう。もちろんその答えはミレットによれば，フロイト自身の主観的偏見に起因しているということになる。

9) こうしたフロイトの男根中心主義に対して，エクリチュール・フェミニンの理論家，L.イリガライは，女性器に由来する女性の欲望表現を，男根と同じような象徴的レベルにまで引き上げることによって女性性の称揚を目指そうとする [Irigaray 1974/77/84]。

【引用文献】

Benjamin, J. (1988). J. ベンジャミン(寺沢みづほ訳)『愛の拘束』青土社，1996年。

Freud, S. (1877-1969). *Gesammelte Werke. 18 vols.* Frankfurt am Main : S. Fischer, 1964-1987. (＝*G.W.1-17*)(邦訳，井村恒郎ほか編『フロイト著作集』全11巻，人文書院，1968-1984)。

——(1905). *Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie. G.W.5.* (邦訳，『性欲論3篇』著5)。

——(1909). 'Analyse der Phobic eines fünfjährigen Knaben.' *G.W.7.* (邦訳，「ある五歳児の恐怖症分析」著5)。

——(1923a). 'Das Ich und das Es.' *G.W.13.* (邦訳，「自我とエス」著6)。

——(1923b). 'Die infantile Genitalorganisation' *G.W.13.* (邦訳，「幼児期の性器体制」著11)。

——(1924). 'Der Untergang des Ödipuskomplexes.' *G.W.13.* (邦訳，「エディプス・コンプレックスの消滅」著6)。

——(1925). 'Einige psychische Folgen des anatomischen Geschlechtsunterschieds.' *G.W.14.* (邦訳，「解剖学的な性の差別の心的帰結の2，3について」著5)。

——(1931). 'Über die weibliche Sexualität.' *G.W.14.* (邦訳，「女性の性愛について」著5)。

——(1933). *Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse. G.W.15.* (邦訳，『精神分析入門(続)』著1)。

——(1940). 'Abriss der Psychoanalyse.' *G.W.17.* (邦訳，「精神分析学概説」著9)。

Irigaray, L. (1974). *Speculum, de l' autre femme.* Paris : Editions de Minuit.

——(1977). L. イリガライ(棚沢直子ほか訳)『ひとつではない女の性』勁草書房，1987年。

——(1984). L. イリガライ(浜名優美訳)『性的差異のエチカ』産業図書，1986年。

Kofman, S. (1980). S. コフマン(鈴木晶訳)『女の謎：フロイトの女性論』せりか書房，2000年。

Millet, K. (1970). K. ミレット(藤枝澪子ほか訳)『性の政治学』ドメス出版，1985年。

Mitchell, J. (1974). J. ミッチェル(上田旻訳)『精神分析と女の解放』合同出版，1977年。

宮澤康人(2001a)「＜父＞殺しの教育学」『教育学研究』第68巻，第4号。

——(2001b)「教育関係のエロス性と教育者の両性具有」根ヶ山光一編『母性と父性の人間科学』コロナ社。

Moore, B. E. and Fine, B. D(et al.)(1990). B. E. ムーア／B. D. ファイン編(福島章監訳)『精神分析事典』新曜社，1995年。

Olivier, C. (1980). C. オリヴィエ(大谷尚文訳)『母の刻印：イオカステーの子供たち』法政大学出版局(りぶらりあ選書)，1996年。

Schafer, R. (1974). 'Problems in Freud's psychology of women.' *Journal of the American Psychoanalytic Association.*22:459-485.